



Title	持続時間の制御から見たイタリア語の二重母音
Author(s)	郡, 史郎
Citation	AULA NUOVA イタリアの言語と文化. 2004, 4, p. 29-43
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93552
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

持続時間の制御から見たイタリア語の二重母音

郡 史 郎

要 旨

正書法上は同じ ai でも、2 母音が別音節に分かれ 2 音節目にアクセントがある ài に比べて、全体が 1 音節に属する下降二重母音でアクセントがある ai は、二重母音であるがゆえにかなり短く、アクセントがない二重母音に近い長さで発音されているのではないかという聴覚印象を、7 名の話者の発音の音響分析を通じて検討した。その結果、(1)アクセントがある下降二重母音 ai は、アクセントがない ai の平均 1.5 倍強の長さを持っていること、(2)2 音節目にアクセントがある ài に比べて、下降二重母音でアクセントがある ai を 1 割から 2 割程度短く言う話者が 7 名中 5 名いること、(3)しかし二重母音であるがゆえに短縮させていると思われるのは 7 名中 3 名に過ぎないことがわかった。この点において話者が Veneto 州か Lazio 州かという出身地域による偏りは特になさそうである。したがって、調音点の移動方向は同じでも、1 音節に属する二重母音かそれとも 2 音節に分かれる母音連続かという条件は、アクセント母音の長さを左右する要因であるとは言えるが、さほど強力なものではないと考えられる。また、母音連続 ao が下降二重母音に準ずる性格を持ち、2 音節目にアクセントがある aò に比べて短かめに発音されるのではないかという聴覚印象もあったが、これをやはり 7 名の発音の分析を通じて検討したところ、ao を aò より短く言う話者はいるが、それは ao が二重母音に準ずる性格を持つためとは言えず、単に最後から 3 音節目にあるという位置のための短縮に過ぎないようである。

1. はじめに

音の長さ（持続時間）は、音声面でのイタリア語らしさを支える大きな特徴である。

子音について言えば、その長短により *eco* と *ecco*, *pala* と *palla* 等々の語が区別される。また、正書法で *gn*, *gli*, *sci*, *z* で表されるいわゆる口蓋子音が母音間にある場合は、その長さが地域性の指標となる（たとえば、*gn* が短いために *bagno* を「バーニョ」のように言うのは北部的であるなど）。

母音については、アクセントがある音節の母音（以下「アクセント母音」と呼ぶ）が長いことで、*Papa* と *papà* が区別される。

しかし、アクセント母音とその持続時間の対応関係は単純ではない。筆者はこれまでいくつかの機会を通じてこの問題を検討してきた。その結果、アクセント母音の長さを左右する要因にはいくつかのものがああり、そうした要因は、音韻的条件、統語的条件、語用論的条件という3つに大別することができることがわかった。拙稿（2001）と重複するが、まずこれについて説明する。なお、本稿では、アクセント位置の示し方は、特に断らない限り、一般的な辞書で用いられている方法を踏襲する。すなわち、*e* または *o* が伝統的なトスカーナ風発音で閉口音の場合は *é*, *ó* とし、それ以外の場合は *à*, *è*, *i*, *ò*, *ù* とする。また、説明の便のために音節の境界を示す場合は、ハイフンを用いる。

たとえば *ancóra* と *àncora* というアクセントの位置が異なる語の対を比べると、*an-có-ra* の *ó*（アクセントあり）が *àn-co-ra* の *o*（アクセントなし）よりも長いことは誰でも気づくことであるが、実は *àn-co-ra* の *à* も *an-có-ra* の最初の *a* より少し長い。すなわち、*co* のように母音で終わる開音節だけでなく、*an* のように子音で終わる閉音節においてもアクセント母音は長いのである。ただ、その伸び方は開音節の場合に比べるとずっと小さい。カナを使うと差が必要以上に強調されてしまうが、わずかな音の伸びを仮に半角の「-」で表せば、*ancóra* は「アンコーラ」、*àncora* は「ア-ンコラ」となる（なお、筆者がこれまでに行ってきた辞書や学習書におけるカナ表記は、なるべ

く簡潔であることを旨としているので、微妙な差をあえて表わそうとする本稿でのカナ表記とは一致しない)。

また、同じ音節環境であれば、語末から2番目の音節にアクセントがある場合がいちばん母音が長くなる。それに比べると、語末にアクセントがある場合や、語末から3番目の音節にアクセントがある場合のアクセント母音の伸びは少ない。したがって、そのことをカナ書き音表記に反映させるならば、地名の Napoli は [ナ-ポリ], caffè は [カッフエー] になる。

さらに、母音の種類によっても長さは異なる。a は口の開きが大きく調音動作の遂行に時間を要するので、口の開きが小さい i や u に比べて音が長い傾向がある。

一方, *mia casa* と *casa mia* という句を比べると, *casa* のアクセント母音 a は, *mia casa* の方, すなわち句末にある場合は十分長い, が, *casa mia* では短めになる。同様に *mia* のアクセント母音 i も *casa mia* の方, すなわち句末にある場合は長い, が, そうでなければさほど長くない。したがって, カナ書きすれば *mia casa* は [ミ-アカーザ], *casa mia* は [カーザミーア] となる (話を簡単にするために, 母音間の s の音価は便宜的に有声に統一しておく)。これは, 語と語の結びつきを規定する統語的要因がアクセント母音の長さを左右していることを示す。

また, 同じ語でも強調するとアクセント母音が長くなる。この現象は caffè のように語末にアクセントがある語において特徴的に見られる (通常形 [カッフエー] ~ 強調形 [カッフエー])。これは語用論的要因による長さの変動である。

さらに拙稿 (2001) では, 話速度の変化に伴う音声の伸縮の度合はアクセント音節において著しいこと, そして伸縮の程度は文頭で大きく, 文末にかけてだんだん小さくなることを明らかにした。これは文内位置という音韻的要因によるアクセント母音長の変動である。

2. 本稿の目的

さて、本稿では、アクセント母音の持続時間を規定する要因の検討の一環として、下降二重母音の問題を取り上げる。やはり音韻的要因である。二重母音とは、内部に調音点の移動が1回あるものの、移動の前と後の要素間の結びつきが強く、全体としてひとつの音節に属する1母音と認識されているものである。そして、下降二重母音とは、ai, au, eu, oiのように、口の開きが相対的に大きい位置から小さい位置に調音点が移動する二重母音である。下降二重母音 ai, au をアクセント音節に含む語として *laico*, *dàino*, *àula*, *càusa* 等がある。これに対し、調音点の移動方向は同じでも *Aida*, *paùra* の ai, au は、2つの別の母音の連続として、それぞれが異なる音節に属すると認識されている。なお、ai, au という音連続は、*Aida*, *paùra* のように第2要素にアクセントがある場合以外は、二重母音として同じ音節に属すると認識される。アクセントがある二重母音は、表記の上では第一要素にアクセント記号を付して *ài*, *àu* 等とする。

ここでなぜこの下降二重母音を問題にするかという点、同じ ai, au でも *A-ì-da* の *ài* や *pa-ù-ra* の *àu* のように別の音節に属する母音の連続（以下これを「母音連続」と呼ぶ）では、アクセントのある母音は十分長く感じられ、カナ書きで表せば [アイーダ] [パウーラ] のようであるのに対し、下降二重母音にアクセントがある *lài-co*, *àu-la* では二重母音 *ài*, *àu* の第一要素はあまり長くなく、むしろアクセントがない *laicità* などの ai の第一要素にかなり近い短さで発音されているのではないかと筆者には感じられるからである。これもあえてカナ書きすれば、[ライコ] [アウラ] に近いように感じられるということである。ここで、この *laico*, *àula* などの二重母音 *ài*, *àu* の第一要素は、*lápide* のように最後から3音節目にアクセントがあるためにやや短めに発音される *à* よりも、さらに短いように思える。したがって、二重母音であるという性格のためにアクセント母音がさらに短くなっているのではないかとと思われるのである。すなわち、正書法上は同じ ai, au で表される音にアクセントがある場合でも、それが別の音節に属する母音連続の場合よりも下

降二重母音の場合の方が、二重母音であるがゆえに、全体としてかなり短いように感じられるということである。

このように、調音点の移動方向が同じでも、1音節か2音節かという要因がアクセント母音の長さを左右する要因になっているのではないかという印象を筆者は持っているわけだが、はたしてこの印象は正しいのか、つまり音節構成がアクセント母音の長さを左右する要因であると言えるのかを、その音響的実態を分析することで検討したい。これが本稿の目的である。

あわせて、Pàolo, ciao などにおける ào という母音連続についても、その音響的実態を検討したい。これは、a と o はそれぞれが別の音節に属する母音連続であるが、やはり [パーオロ] [チャーオ] のようにアクセント母音がやや短く、二重母音に準ずる発音になっているように感じられるからである。

3. 下降二重母音 **ai** と母音連続 **ai** の長さの検討

以下では下降二重母音 ai をとりあげて、アクセントがある下降二重母音 **ai** と、単母音 a の後にそれとは別の音節に属するアクセント母音 i が連続する **ai** との間に長さの違いがあるかどうか、そして違いがあるとすれば、それが二重母音か母音連続かという性格の違いによるものかどうかを検討する。

母音の長さは前後の子音の種類によってもかなり大きく変化することが知られている。したがって、先ほど例に挙げた *laico* の ai と *Aida* の ai は直接比較することができない。もし *laico* という語があれば *laico* と直接比較することができるが、そのような語はない。そこで、ここでは、現実には存在しないがイタリア語の音構成としては十分にありうるような無意味語を含むセット *màino* (*mài-no* : 稀用だが *mainare* の活用形または姓, ai はアクセントがある二重母音), *maino* (*ma-i-no* : 無意味語, ai は別の音節に属する母音連続), *mainò* (*mai-nò* : *mainare* の活用形, ai はアクセントがない二重母音) を使ってイタリア語母語話者の発音を求め、その ai 部分の長さを比べることにする。これにより、ai がアクセントを持つ二重母音の場合と、別の音節に属する母音連続で i にアクセントがある場合、そしてアクセントがない二

重母音の場合を比較することができる。子音を m と n にしたのは、音境界がわかりやすく、母音長が測定しやすいからである。

さらに、もし ai の長さに違いがあれば、それが二重母音か母音連続かという性格の違いによるものかどうかを判断する際の基準として、màينو, manينو, maninò という語 (manينو の他は無意味語) の発音を求め、その a と i の長さを測定する。これはなぜかという、音響分析の結果、もし màينو の ai が maino の ai よりも短いという結果が得られたとしても、そこから直ちに二重母音は二重母音であるがゆえに母音連続より短いと結論づけるわけにはいかないからである。なぜならば、仮に màينو の ai が二重母音ではなく、別音節に属する a と i の連続であるとすれば、あるいは形式的には二重母音でも独立性が強く、実質的には別音節に属するかのようには発音されているとすれば mà-i-no であるわけで、その場合、第1節で述べたような、語末から3番目の音節にアクセントがある場合のアクセント母音の伸びは少ないという規則のために、a はそれほど長くないことになる。そしてその結果、 mà-i-no の ai 部分が ma-i-no のそれよりも短くなるということが考えられるからである。実際には、やはり第1節で述べたように、a は i より本来的に長い傾向があるので、 mà-i-no の ai は mai-no のそれよりも短くはならないかもしれない。そのようなわけで、もし màينو の ai が maino の ai よりも短いとしても、それは màينو の方が二重母音だからとは言えないのである。そこで、a と i が明らかに別音節に属する màينو と manينو を使って a と i の長さの合計の大小を比べ、それと màينو と maino における ai の長さの大小を比べることにする。そうすることで、もし màينو の ai が maino の ai よりも短く、しかも màينو と maino における ai の長さの差が màينو と manينو における a と i の合計長の差よりも大きければ、それは màينو の ai が二重母音であるがゆえに短く発音されているからだということになるはずである。

3.1 方法

テスト語である màينو, maino, mainò, màينو, manينو, maninò のそれぞれ

にアクセント記号を付して印刷したカードを作成し、話者には無意味語を含むことを説明した上で、本稿の目的とは関係のない他の単語や文と一緒にして、ランダムな順で一語につき最終的に計6回、あるいはそれ以上の発話を得られるように読んでもらった。

話者は Lazio 州生育の4名と Veneto 州生育の3名、計7名にお願いした。これは、地域差がある可能性を考慮してのことで、これまで知られている発音の地域差は、北（ここでは Veneto）と南（ここでは Lazio）の間のものがいちばん大きいからである。

録音にはラベリアマイクと DAT または MD を用いた。母音長の測定は音声分析ソフト Pitchworks (Scicon R&D, Macintosh 版) を利用して、広帯域スペクトログラム上で視察によって行った。このソフトは、おそらくプログラム上のサンプリング周波数設定のミスのために、実際の値と測定値との間に約0.2%のずれが生じるが、本稿で問題にするような200~500msecの長さについては、そのずれは1msec以下であるから、補正は行っていない。

3.2 結果

図1に *màino*, *maìno*, *mai'nò* における ai 区間の長さを7名の話者（各6回以上発話）の平均で示す。図2は同様に *mànino*, *manìno*, *maninò* における a

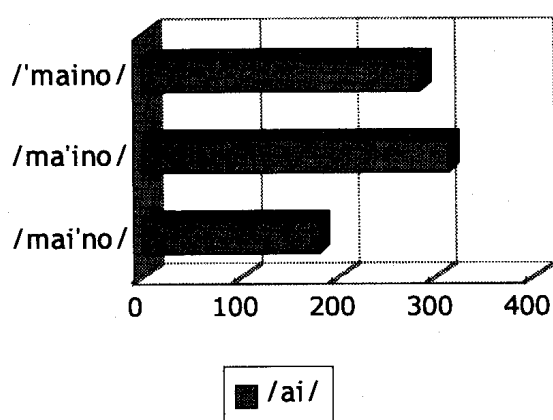


図1 *màino*, *maìno*, *mai'nò* における ai の長さ：話者7名の平均（単位 msec）

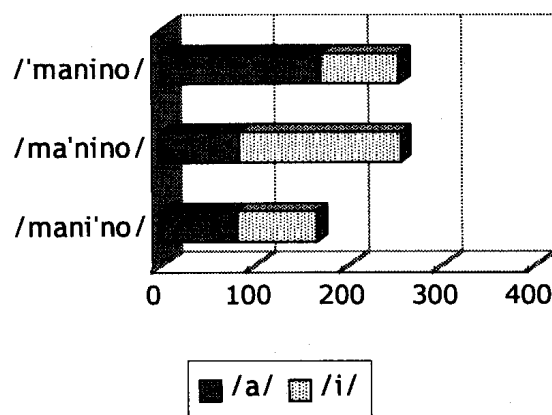


図2 *mànino*, *manìno*, *maninò* における a と i の長さ：話者7名の平均（単位 msec）

と i の長さの平均を示す。両図とも、アクセント位置はアクセント音節直前にアポストロフィをつけることで表している。

まず図1を見ると、màino, maìno, mainò における ai の長さは、maìno がいちばん長く (313msec), 次いで màino (284msec), mainò (179msec) の順で短くなっている。màino と maìno の差は30msec 弱でさほど大きくはない。アクセントがない mainò は他より明らかに短い。したがって、まず言えることは、二重母音 ai にアクセントがある場合は、アクセントがない場合に比べて、母音全体が相当長くなる (7名の平均で1.58倍) ということである。この関係を話者ごとに示したのが表1である。

表1の下から2段目を見ると、アクセントがある場合とない場合の長さの比率は話者によってかなり異なる。これは、話速度が遅ければアクセントがあることによる伸長が大きく (Lazio_4など)、話速度が速ければ伸長が小さい (Lazio_3など) ことによるようである。両側 t 検定による長さの差の統計的有意確率を表1の最下段に示したが、全員有意 ($p < .05$) である。ここで、ai のうちアクセントの有無に応じて変化するのはどの部分かという点、図3に示すスペクトログラム例 (話者 Lazio_1) から明らかなように、もっぱら第一要素 a である。

なお、同じ7名の話者による mànino, manìno, maninò の発音では、単母音 a の長さは平均してそれぞれ171, 84, 81msec, 同じく i の長さは84, 171, 85msec であった。したがって、この資料では、語末から3音節目にあるた

表1 二重母音 ai にアクセントがある場合とアクセントがない場合の長さの比較 (単位 msec)

話者	Lazio_1	Lazio_2	Lazio_3	Lazio_4	Veneto_1	Veneto_2	Veneto_3	平均
màino の ai	256	250	174	388	278	319	323	284
maìno の ai	152	153	137	219	185	191	215	179
ai 長の比率	1.68	1.63	1.26	1.77	1.51	1.67	1.50	1.58
差の有意確率(p)	0.000 ***	0.000 ***	0.006 **	0.000 ***	0.000 ***	0.000 ***	0.011 *	

めにやや伸び率が小さいはずの単母音 a でも、また語末から 2 音節目にあるが開口度の小ささのために伸び率が小さいと想定される i でも、アクセントがあることで約 2 倍の長さに発音されているわけである（後述する 4 節の資料では、語末から 2 音節目にある単母音 o はアクセントによって 2.5 倍程度に伸びている）。これと比べると語末から 2 音節目の二重母音 ai のアクセントによる伸びが 1.5 倍強というのは小さい。これは、やはり二重母音 ai において長くなるのはもっぱら第一要素であることによるとと思われる。

図 1 からもうひとつ言えることは、màino の ai は mainò の ai よりも短いようだということである。この関係を話者ごとに検討したのが表 2 の上 5 段である。両側 t 検定による長さの差の統計的有意確率を 5 段目に示しているが、7 名中 5 名が有意である。したがって、màino の ai を mainò の ai よりも短く言う話者が多数を占めるということと言える。

上の 2 点の特徴を本稿式のカナ表記に反映させれば、màino は [マーイノ] が適当であろう。

続いて、màino の ai が mainò の ai よりも短いのは二重母音という性格によるものかどうかを検討する。まず図 2 で mìnino, manìno における a と i の合計長の平均を見ると、mìnino (254msec), manìno (255msec) で同じである。先に第 1 節で、語末から 3 番目の音節にアクセントがある場合のアクセ

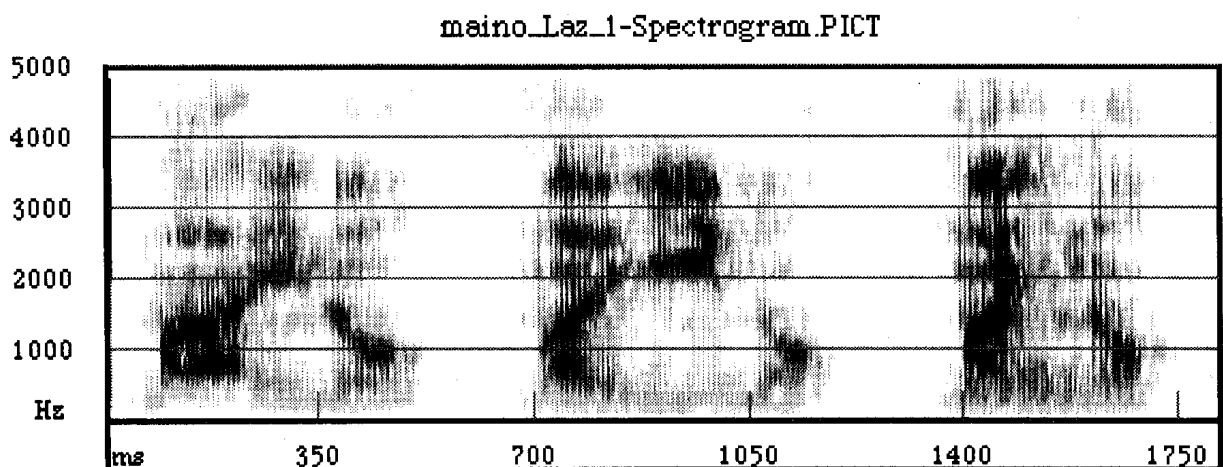


図 3 màino, mainò, mainò のスペクトログラム例（話者 Lazio_1）

ント母音の伸びは少ないと述べたが、ここでは語末から3番目の音節にアクセントがある *mànino* の *a* と、語末から2番目の音節にアクセントがある *manìno* の *i* が同じ長さになっており、その結果 *a* と *i* の合計長が2語とも同じになっている。これは、やはり第1節で述べたような、*i* は *a* より本来的に短いという性質によるものと考えられる。

次に、*màino* と *maìno* における *ai* 連続の長さの関係と、*mànino* と *manìno* における、連続していない *a* と *i* の合計長の関係とを比べてみる。7名の話者の平均値でこの関係を図4に示す。この図を見ると2本の線が平行でないが、ここから、*ai* が連続している場合と非連続の場合では長さの扱いが異なっていることがわかる。先ほどの表2には、この関係についても話者ごとに示している。表には *màino* と *maìno* の2つの環境における *ai* の長さとその環境による差（2～4段目）、そして *mànino* と *manìno* の2つの環境における *a* と *i* の合計長とその環境による差（6～8段目）を示してある。ここで注目したいのは、*mànino* と *manìno* の2つのアクセント環境における *a* と *i* の合計長の差よりも、*màino* と *maìno* の2つの環境における *ai* の長さの差のほうが小さいかどうかである。もし小さければ、それは *màino* の *ai* が二重母音であるために短く発音されていることになる。そこで、*màino* と *maìno* における *a* と *i* の合計長の差から *mànino* と *manìno* における *ai* の長さの差を引いた値を「*ai* の二重母音性による伸縮量」として、表2の下から2段目に示した。この値が負であれば、*màino* の *ai* が二重母音であるために平均的に短く発音されているものと考えられる。

さらに、この *ai* が二重母音性であることによる伸縮の有無が統計的に有意かどうかを判断するための指標として、*a* と *i* が連続か非連続かという条件（*màino*, *maìno* 対 *mànino*, *manìno*）、そしてアクセントが *a* にあるか *i* にあるかという条件（*mànino*, *màino* 対 *manìno*, *maìno*）を2つの要因として *ai* 長の分散分析を話者ごとに行い、その2要因の交互作用の統計的有意確率を表2の最下段に示した。もし、*a* と *i* が連続か非連続かという条件と、アクセントが *a* にあるか *i* にあるかという条件の間に有意な交互作用があるなら

表2 màino と maino における ai 連続の長さと, mìnino と manino における非連続の a と i の合計長 (単位 msec)

話者	Lazio_1	Lazio_2	Lazio_3	Lazio_4	Veneto_1	Veneto_2	Veneto_3	平均
màino の ai	256	250	174	388	278	319	323	284
maino の ai	283	279	223	385	307	317	394	313
その差	-28	-29	-49	3	-29	1	-71	-29
差の有意確率 (p)	0.043 *	0.042 *	0.001 ***	0.837	0.012 *	0.867	0.042 *	
mìnino の a+i	215	215	180	333	270	255	314	254
manino の a+i	223	234	182	299	264	241	340	255
その差	-8	-20	-2	34	6	14	-26	0
差の有意確率 (p)	0.485	0.048 *	0.801	0.000 ***	0.519	0.032 *	0.346	
ài の二重母音性による伸縮量	-19	-9	-48	-31	-35	-13	-45	-29
交互作用の有意確率 (p)	0.245	0.549	0.001 *	0.045 *	0.013 *	0.204	0.415	

ば、それは、図4と同じ形式でその話者の発音を示した場合に、2本の線が平行ではないことが統計的に有意であることを意味する。しかも、その場合にもし2本の線の間隔が左の方で狭いようであれば、それはその話者が màino の ai を二重母音であるがゆえに短く発音していることになろう。

そこで表2を見ると、「ài の二重母音性による伸縮量」は数値の上ではどの話者も負になっているが、統計的に有意($p<.05$)なのは、表の最下段にアステリスクをつけた Lazio 州出身の2名と Veneto 州出身の1名だけである。つまり、màino の ai を二重母音であるために短く発音しているのは7名のうち3名だけで、他の話者は màino の ai を maino の ai よりも短く言っていたとしても、それは特に二重母音だからとは言えないことになる。この点で特に地域的偏りはなさそうである。ここで Lazio_4という話者は、màino と maino では ai の長さに差をつけてはいないが、manino の i よりも mìnino の a をずっと長く発音することで、相対的に ai の二重母音としての一体性を示しているようである。これは、この話者の話速度の遅さがこのような形で表

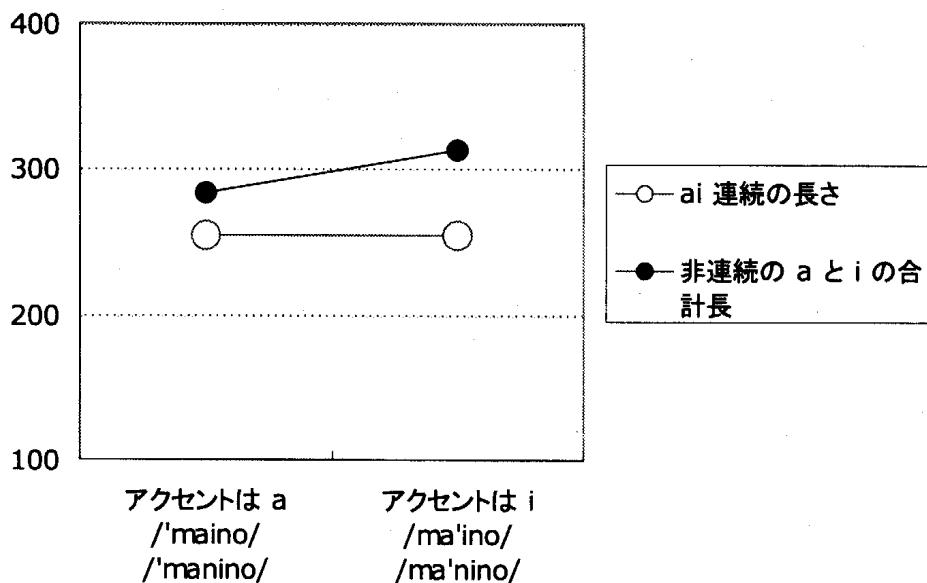


図4 maino と ma'ino における ai 連続の長さの関係と, manino と ma'nino における非連続の a と i の合計長の関係

れたものかと考えられる。なぜならば、1 節末で述べたように、話速度が遅いと文頭のアクセント母音の方（ここでは語頭である a）が、文末よりいっそう長くなることの反映と思われるからである。

本稿のテスト語は無意味語を含むために、この方法によって得られる結果はひとつの仮説にとどまらざるを得ない。しかし、以上得られた結果をまとめると、maino の ai のようにアクセントがある二重母音は、ma'ino の ai のような母音連続よりも短めに言う話者が多いこと（あえてカナ書きすれば [マーイノ] 対 [マイーノ]）、しかしそれは必ずしも二重母音だからというわけではないということになる。したがって、調音点の移動方向は同じでも、1 音節に属する二重母音か 2 音節に分かれる母音連続かという要因は、アクセント母音の長さを左右する話者と、そうでない話者がいるようである。つまり、これはアクセント母音の長さを左右する要因とは言えるが、さほど強力なものではないと考えられる。この点で地域的な偏りはなさそうである。

4. ào の長さの検討

次に、ào という母音連続の音響的実態を検討したい。先述のように、こ

れはそれぞれが別の音節に属する母音連続であるが、人名の *Pàolo* であればアクセント母音がかなり短く、二重母音に準ずる発音になっているように感じられる。

検討の方法としては、前節までのやりかたを踏襲し、*Pàolo* と無意味語 *paòlo*, *paolò* における *ao* の長さの関係、さらにそれと無意味語 *pànolo*, *panòlo*, *panolò* における *a* と *o* の合計長との関係を比べることにする。話者、録音と分析の方法も前節までと同様である。なお、ここで *ò* は実際の発音が開口音であることを必ずしも示していない。

4.1 結果

図5に *Pàolo*, *paòlo*, *paolò* における *ao* の長さを7名の話者の平均で示す。図6は同様に *pànolo*, *panòlo*, *panolò* における *a* と *o* の長さの平均を示す。

まず図5を見ると、*Pàolo* における *ao* の長さは *paòlo* の場合よりも平均で25msecほど短い。次に図6を見ると、*pànolo* における *a* と *o* の合計長は *panòlo* の場合よりも平均で30msecほど短い。したがって、*Pàolo* の *ao* は *paòlo* の *ao* より平均すれば短いですが、その長さの違いは、*pànolo* と *panòlo* における *a* と *o* の合計長の違いとほぼ同じであり、*Pàolo* の *ao* が二重母音的

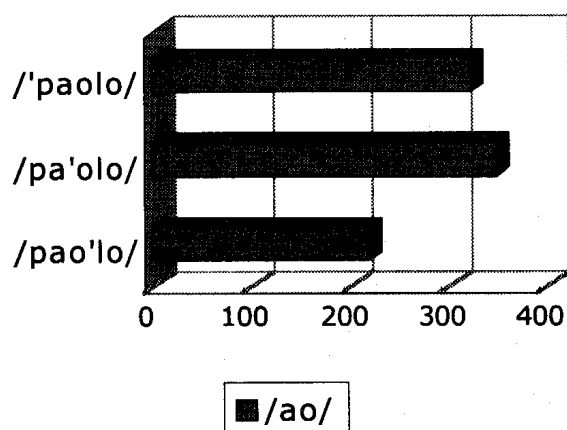


図5 *pànolo*, *panòlo*, *panolò* における *ao* の長さ：話者7名の平均（単位 msec）

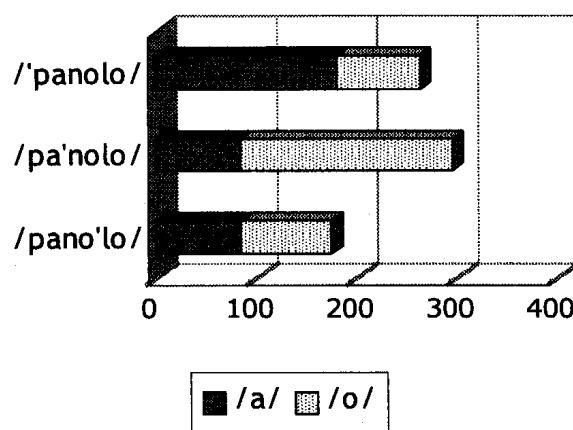


図6 *pànolo*, *panòlo*, *panolò* における *a* と *o* の長さ：話者7名の平均（単位 msec）

な振る舞いをするから短く発音されているということはなさそうである。

この関係を話者別に見たのが表3である。Pàolo の ao を paòlo の ao より統計的有意に短く言うのは7名中3名（逆に長く言うのが1名あり）、pànolo の a と o の合計を panòlo のそれよりも統計的有意に短く言うのは7名中5名であることがわかる。また、この表の「ao の特異性による伸縮量」の欄からは、Pàolo の ao を準二重母音ということで有意に短く発音している話者はおらず、むしろ有意に長く発音している話者が Lazio と Veneto に1名ずついることがわかる。したがって、ao を ao より短く言う話者はいるが、それは ao が二重母音に準ずる性格を持つためとは言えず、単に最後から3音節目にあるという位置のための短縮に過ぎないということであろう。

5. まとめ

当初の仮説は、調音点の移動方向は同じでも、1音節に属する二重母音か2音節に分かれる母音連続かという要因がアクセント母音の長さを左右して

表3 Pàolo と paòlo における ai 連続の長さと、pànolo と panòlo における非連続の a と i の合計長（単位 msec）

話者	Lazio_1	Lazio_2	Lazio_3	Lazio_4	Veneto_1	Veneto_2	Veneto_3	平均
Pàolo の ao	304	288	228	443	311	313	366	322
paòlo の ao	339	343	251	419	307	328	443	347
その差	-35	-55	-23	24	4	-15	-78	-25
差の有意確率 (p)	0.048 *	0.001 **	0.092	0.023 *	0.810	0.265	0.004 **	
pànolo の a+o	217	234	163	356	272	260	337	263
panòlo の a+o	250	270	184	391	274	319	372	294
その差	-33	-36	-21	-36	-2	-58	-35	-32
差の有意確率 (p)	0.048 *	0.001 **	0.092	0.023 *	0.810	0.265	0.004 **	
ào の特異性 による伸縮量	-2	-19	-2	60	6	43	-42	6
交互作用の 有意確率 (p)	0.907	0.171	0.909	0.000 ***	0.742	0.029 *	0.519	

いるのではないか、具体的にはアクセントを持つ下降二重母音 ai は二重母音であるがゆえにかなり短めに発音されているのではないかという聴覚印象であった。これを、7 名の話者による *màino*, *maìno*, *mainò*, *mànino*, *manìno*, *maninò* という無意味語を含む単語セットの発音の音響分析を通じて検討した。その結果、(1)アクセントがある下降二重母音 *ai* は、アクセントがない *ai* の平均1.5倍強の長さを持っていること、(2)2 音節目にアクセントがある *ai* に比べて、下降二重母音でアクセントがある *ai* を 1 割から 2 割程度短く言う話者が 7 名中 5 名いること、しかし(3)二重母音であるがゆえに短縮させていると思われたのは 7 名のうち 3 名に過ぎないことがわかった。この点で話者が Veneto 州か Lazio 州かという出身地域による偏りは特になさそうである。したがって、調音点の移動方向は同じでも、1 音節に属する二重母音か 2 音節に分かれる母音連続かという条件は、アクセント母音の長さを左右する要因とは言えるが、さほど強力なものではないと考えられる。

もうひとつの仮説、すなわち、母音連続 *ào* が下降二重母音に準ずる性格を持ち、2 音節目にアクセントがある *aò* に比べてずっと短かめに発音されるのではないかという聴覚印象については、*Pàolo*, *paòlo*, *paolò*, *pànolo*, *panòlo*, *panolò* という無意味語を含む単語セットの発音の分析を通じて検討したところ、*ào* を *aò* より短く言う話者はいるが、その場合でも *ào* が二重母音に準ずる性格を持つためとは言えず、単に最後から 3 音節目にあるという位置のための短縮に過ぎないようである。

引用文献

郡史郎 (2001) 「イタリア語の韻律的特徴 ― 話速度とリズム―」『Aula Nuova イタリアの言語と文化』3, pp.91-100.